**大学のまち・京都づくり推進プラン第２回検討会　議事録**

１　日　時

平成２５年８月２８日（水）１８時００分～１９時４０分

２　場　所

ルビノ京都堀川　３階　朱雀の間

３　出席者（７名中４名出席）

【委　　　　員】　高見座長、大西委員、岡村委員、森島委員

４　主な発言

＜京都ブランドについて＞

　・文化・宗教など、目に見えない資産や価値の中にこそ、京都がグローバルに打って出られる強みがある。

・独自性を出すため早い段階からＣＳＲに着眼し、社会参加を戦略として打ち出し、社会的信用を得て消費者から信頼されることを強みと考える企業もある。

＜大学のまち・京都としての目指すべき方向性について＞

・全体の方向性としては、京都府提示のまとめかたになるかと思う。

・特区構想のテーマは、大学資源を活用して国際的競争力を獲得する「京都ベンチャー」ではないか。他の個別施策は、先導的に要望、活用するスタンスかと思う。

・大学設置基準などの規制緩和項目を国に要望していくことが本当に必要なのか。

・学校法人では規制緩和がなくとも産学連携に取り組んでおり、今後必要と考えるのは

1. 京都の地域課題に大学間が連合して貢献していくこと
2. 貢献できる人材を大学が輩出すること
3. そのために理系だけでなく、社会・人文系がうまく接続していけること

・従来府や市が取り組んできた産学公連携やベンチャー育成等の施策の到達状況を検証した上で、目指すべき方向を考えていくべきではないか。

・大学のグローバル化の促進に当たり、留学生の住居確保の問題に支援が必要。

大学のまちのシンボルとして、産学公で留学生を支援する施設の建設、グローバル人材養成プログラムを活用して日本の深さを英語で学べる互換科目の開発、卒業や単位互換の仕組みを大胆に変えた新たな「University of Kyoto」ができれば良いのではないか。留学生を１の項目として起こせば、エッジの効いた政策となるのではないか。

・京都の強みは、ハードインフラではなくソフト（知恵）インフラにある。

知恵インフラは４要素で構成され、これらの要素が融合、補完しながら蓄積を生み、先端企業が成長してきた。

1. 大学（人的資源、知的雰囲気、学問や議論を好む風土）
2. 匠の技（伝統産業、意匠、デザイン、オンリーワン町工場の集積と１０年かけて試作を議論できる土壌等）
3. 老舗（経営の知恵、家元、総本山等）
4. 祇園まち（国際的知名度、コミュニケーションの仕掛け）

疲弊の指摘される要素へ、大学がインスパイアし、萌芽的なプロジェクトを応援・支援することが求められているのではないか。

　・産学連携は京都のポテンシャルであり、製造業の産学連携は進んでいるが、非製造業である文系との産学連携が進んでいない。

大学と社会との接点や、人が動き交わる場を作るため、大学が人と人とのつながりを作るコミュニケーション、ファシリテート能力のある人材育成に取り組む必要がある。

　・目指していくべき方向性の中には、大学側へのインセンティブとなる項目も多いが、資金力、学生数等による大学間格差をどのように反映させるのか、中小企業の問題と共通するが、それぞれの強みを活かし生きていく力を見いだすことが重要。

・それぞれの大学は努力しているので、その努力に加えて京都に立地することによるメリット感を出すことが望まれる。

以上